

第16回 ちゅうでん教育振興助成（平成28年度）

報告書資料 一般-73

学校名・団体名	相楽東部中学校「お茶学習研究会」
HPアドレス	<a href="http://www.kyoto-be.ne.jp/kasagi-jhs/cms">http://www.kyoto-be.ne.jp/kasagi-jhs/cms</a>
コース	教育研究
活動・研究 テーマ	中学校の「お茶学習」を体系化したカリキュラムの作成
<p>〈活動・研究の意義、目的〉</p> <p>両校とも国立教育政策研究所から「総合的な学習の時間」について研究指定を受け、「お茶」を学習対象にしたカリキュラムの開発に取り組んできた。総合的な学習の時間で「お茶」について指導している学校は多くあるが、「お茶」についての指針を考え、体系的に学習するカリキュラムを作成している学校は見当たらない。また、「お茶」に関わる本は多数あるが、多くの内容は、「お茶」についての知識がほとんどである。そのため両校とも、「お茶」についての指導をどうすればよいか、悩み・苦しみながら指針・カリキュラムを作成してきた。両校の研究から「お茶学習」として体系化した学習にまとめ、発表することは、これから「お茶」について学習しようとする学校に考え方や進め方を提示することができ、指導をし易くするものと考えられる。また、「お茶」だけでなく、ふるさとの特産品を学習対象としたカリキュラムの開発の参考にもなるものとして全国の学校に知らせるために本にまとめる。</p>	

## 1 活動の経緯

京都府相楽東部広域連合管内には、2校の中学校しかない。両校とも生徒数が激減し、小規模校になっている。生徒一人一人の能力を伸ばし、学校を活性化させるためには、相楽東部広域連合ならでできる教育活動や外部との連携を強化することが重要であると考え、両校とも7年前から総合的な学習の時間の中で「お茶」を題材とし、外部との連携を強化しながら探究的・協同的な学習活動を研究し実践し、「我がふるさとを愛し、我がふるさとを誇りに思う生徒の育成」を目指してきた。宇治茶の主産地ということもあるが、京都府内では、両校ほど「お茶」について学習している中学校は存在しない。管内の2校の中学校は、この7年間「お茶」について体系化したカリキュラムを開発してきた。開発を通して、学習内容を考えるだけでなく、「お茶」を体系的に学ばせることが重要であると気付いてきた。そのため昨年度から両校の教員が協力して、体系化したカリキュラムを開発し、実践することにした。また、どのようにお茶学習を進めればよいか、全国の学校が実践しやすいように、「お茶学習」の指針づくりを作成した。本年度は、この指針に基づいたカリキュラムを作成し実践することにした。おそらく日本で初めて、お茶学習の指針に基づいて「お茶学習」を体系化したカリキュラムで実践した中学校と考えられる。両校の実践を本にまとめ知らせることは、これからお茶について学習する学校の参考事例になるとも考えている。

## 2 活動内容

### (1) 活動内容

- (1) 研究会参加者 和東中学校、笠置中学校の教職員 30名
- (2) 研究内容 体系化した「お茶学習」のカリキュラム開発と実践をまとめた本の作成
- (3) 活動の特色

京都府内の中学校では、明確に教育課程に位置づけて総合的な学習の時間で、「お茶」について学習している学校は多くない。さらに指針に基づき系統だっってカリキュラムを作成し取り組んでいる学校は、日本の中学校ではないと思われる。本年度、2校の相楽東部広域連合立中学校は、指針に基づきカリキュラムを作成し、実践することにした。総合的な学習の時間では、問題解決的な活動が発展的に繰り返される探究的な学習にすること、他者と協同して課題を解決する協同的な学習をすることが重要である。このような学習指導ができる「お茶学習」を体系化した指針・カリキュラムを作成したことは、ただ単にお茶についての学習をするだけでない。生徒に身に付けたい力を明確し、学校の課題解決に向けても効果的に実践できる。指針に基づき体系化したカリキュラムを本にまとめることは、キャリア教育・環境教育等のように「お茶学習」として確立できる。また、広く「お茶学習」として知ってもらうためには、本にまとめたり発表会を開催することで、多くの学校に「お茶学習」を広めることになり、中学校としては大きな特色ある活動と思われる。

### (4) 活動時期および内容

#### 活動時期

- ① 5月 カリキュラム作成に向けた指針の確認とカリキュラムの作成
- ② 7月 カリキュラムの実践交流
- ③ 8月 「お茶学習」の本作りに向けての協議
- ④ 9月 カリキュラムの実践交流
- ⑤ 10月 「お茶学習」の本作りに向けての協議
- ⑥ 11月 「お茶学習」の本作りに向けての協議
- ⑦ 12月 「お茶学習」の本作りに向けての協議
- ⑧ 1月 本の原稿の作成
- ⑨ 2月 本の原稿の校正
- ⑩ 3月22日 「お茶学習」の実践交流と本の発表会 南山城村文化センター「やまなみホール」

#### 内容

「お茶学習」について実践した内容をまとめた本の作成と発表会

#### 期待される効果

- ① 指針に基づいた全国初の「お茶学習」のカリキュラム作成し実践をまとめることは、相楽東部広域連合管内の両校の教員の誇りと自信になる。
- ② 宇治茶の主産地に住む生徒にとって、「お茶」に愛着を持ち、誇れるようになる。
- ③ 教員の関わりが深まり、指導方法の工夫をはじめ、より質の高い教育の実現を目指すようになる。
- ④ 地域や学校、生徒の実態、特色に応じた学校の独自の学習活動を展開することができる。
- ⑤ カリキュラムを編成し、実施し、見直し、改善することでカリキュラムマネジメントの力が身に付く。
- ⑥ これからふるさとの特産品を教材として学習する学校の参考となる。

## まえがき

平成 26 年 5 月に民間研究機関「日本創生会議」は、全国の 49.8%の 896 市町村が「消滅可能都市」と試算されると発表したが、和東町・笠置町・南山城村もこれに該当している。国は、人口減少と東京一極集中という課題を、地方がそれぞれの特徴を活かした社会を創生することで解決しようと「まち・ひと・しごと創生本部」を設置した。平成 27 年 12 月に文部科学省からは、一億総活躍社会の実現と地方創生の推進のために、学校と地域が一体となって地域創生に取り組めるよう、中央教育審議会の 3 つの答申を踏まえて、その具体化を強力に推進するために策定した「次世代の学校・地域」創生プランが発表された。

答申でも述べられているが、未来を創り出す子供たちの成長のためには、学校だけではなく、地域住民や保護者等も含め、一人一人が教育の当事者となって、社会総掛かりで教育の実現を図ることが大切である。和東中学校と笠置中学校では、答申が作成される前から学校・地域が協働して創りあげるものであることを強く意識して教育の実現に向け取り組んできた。学校は地域の学校であることを常に考え教育実践を積み上げてきた。しかし、残念なことに生徒の中には自分達の住む地域について自信を持って語れない生徒がいた。我々教師や地域の方々は、生徒に自分達の地域に誇りを持ち、愛せるようになってほしいと、強く願っている。それには、生徒のふるさとへの愛着を高めるに、学校と地域が連携・協働して地場産業である「お茶」を学習の対象にして取り組むことが一番良いと考え、実践することにした。また、「お茶」について取り組むことで、学校は地域から支援を受けるだけでなく、地域にも貢献できると考えた。地域と連携して活動することで、中学生が地域で活躍する態度を見せることができるからである。

地域と連携・協働し、ふるさとを愛し誇りに思う態度の育成をねらった「お茶学習」について、まだまだ工夫・改善の余地は多く、発展途上の段階ではあるが、これまでの取組をまとめ、今後に生かしていくために、この度出版させていただくことにした。未熟で至らない部分は多々あるが、多くの方々からご意見やご指導を賜り、今後の礎としたいと考えている。平成 29 年度に京都府では、宇治茶をテーマにお茶生産の美しい景観維持やお茶産業の振興、お茶文化の発信などを進めた「お茶の京都」に取り組む。このような時期に学校の取組がこれからの「お茶学習」のあり方を探り、「お茶学習」のステップになれば幸いである。

平成 29 年 3 月吉日

和東中学校長 尾野 和広  
笠置中学校長 村上 栄

あとがき

和東中学校、笠置中学校の先生方が担う 1 人当たりの仕事量は、学校規模が小さいため他校の学校より多い。また、両校は毎年研究指定を受けている。今振り返ると、このような状況で長年に渡りお茶学習について研究し、実践を続けてこられたと感心する。職員室では、先生方がよく「ふるさとを愛し、ふるさとを誇りに思う生徒にしよう」と言っている。そんな思いが先生方の頑張る源だったのかもしれない。お茶農家の方々の話を聞くと、「私たちは、お茶づくりが楽しくやり甲斐がある」「楽しいのは、家族全員で良いお茶を作らせてもらったこと」「気持ちよく仕事をやっていけば良い茶が作れる」と言っておられた。家族とお茶に対する深い思いと愛情を感じる。我々はこのようなことを知り、お茶学習を進めることが大切であると思っている。

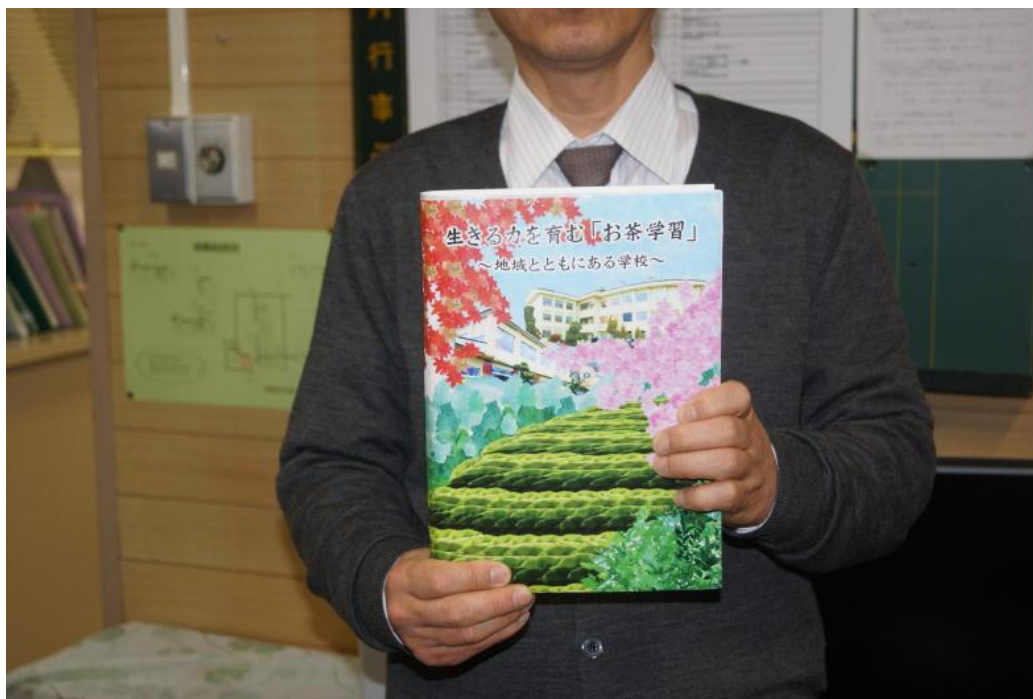
京都府では毎年学力診断テストを小学校 6 年、中学校 1 年、2 年で実施しているが、結果を見ると、両校の生徒は小学校の時よりも学力が上がっていることが多い。お茶学習の取り組みが学力向上にどれだけ寄与しているか、わからないが効果があったことは間違いないと思っている。

お茶学習のまとめとして本にまとめるのに、多くの先生方に執筆してもらった。和東中学校では、事務の方から講師の先生を含め全ての教職員が関わった。中には、「全くお茶について知らなかったので、いろいろ調べまとめるのに大変苦労した」と言っている方もいた。本を作成することで、お茶についてかなり調べ考えていた。お茶について多くのことを学んだことと思われる。「今の先生方は学ばなくなっている」と言っている大学の先生がいた。今まであった研究会がたくさん無くなってきているとのことであった。改めて今の学校現場で研究を進めることは大変であると思ったものである。教師が学ばなければ生徒の学力を付けることはできない。学力問題が大きな話題となって騒がれているが、教師の学びがなければならないと思う。

お茶学習を実践するのに、教科担任制で授業を行う中学校の先生方が同じ指導案や教材についてこれほど検討している中学校は、日本ではないのではないかとと思われる。この結果「学校組織の活性化」や「教員の資質能力の向上」にも大いに役立つものと考えている。

お茶学習を研究し実践しまとめたことは、大変ではあったが得たものも多かった。今後はお茶学習の取り組みの成果と課題を踏まえ、今後も継続させることで両校の特色ある教育活動として根付かせていきたいと考えている。今回の出版については、和東中学校のお茶連絡協議会の方々、お茶農家の籠嶋 渉さん、京都教育大学の山下 宏文教授をはじめ多くの関係者の皆様のお世話になり深く感謝しています。ありがとうございました。

和東中学校 校長 尾野 和広  
笠置中学校 校長 村上 栄



作成したお茶学習の本